

2. 方法

3つの計画

- 授業実践Ⅰ
- 関関知識論
- 基本的知識定着調査

基礎知識
基本的知識

授業実践Ⅰ → 関関知識論 → 授業実践Ⅱ

授業デザイン

【導入】終業式で着ての正多角形の図案に囲まれる図形の扱い

- ・4年生：内角の和と求め方が、外角の和は最も早い
- ・4年生：正三角形・正方形、角度について学習していない

【本講】正多角形の作図

- ・外角は二等角の外角を入力させることにより
- ・4年生でも正多角を描けることができる
- ・内角を外角との関係で考えればよいことができる
- ・実際に正多角の図形を描いていく

【本講】を活用して正多角形を描くことが惜しい

角度と面の数を整理して

表から算出！正多角形の面の数×外角÷360°をみつけさせる

本研究での統合化	中島による統合化	古藤による統合化
一般化による統合	集合による統合	普遍化による統合
拡張化による統合	拡張による統合	拡張化による統合
補完化による統合	補完による統合	
組織化による統合		止揚化による統合

2. 教育支援プログラムの点について

第1回、第2回、及び第3回全において「分かる」という概念が中心の物語として演出されたが、各巻で扱った「他者理解を促進するためのスキル」についての知識理解をさせたことが示唆された。

SEM（構造方程式モデリング）による分析

ポリフィノ生成

作数決定

加減乗除記憶

数値記憶能力

数式記憶能力

言語理解力

テスト得点

学習の目標

生涯指導のめざすところ

自己指導能力の育成

- ・実生活に自己指導を必要とすること
- ・良質な人間関係を築くこと
- ・自然決断の機会を与えようの可能性の活用を学ぶこと
(受給者意識)

セルフ・エフィカシー（自己効力感）

セルフ・エフィカシーに相対する介入・トレーニングの提供及び有効性の検証

98.1% 35.0% 35.0% 35.0%

98.1% 35.0% 35.0% 35.0%

生涯指導のめざすところ

学習の目標



2. 教学におけるパターンとその探究について

①2パターンへの探究段階について

指摘①：教科書を読む

指摘②：教科書を見直す

指摘③：意味問題をさらに発見させ、パターンを表で整理したり、文字式で記号化したりする

指摘④：パターンを意味した表や文字式などの記号を導き出し、さらに規則性や発見を記し、付け加える

指摘⑤：パターンを意味した表や文字式を導き出し、導出した規則性や発見を振り下ろし、体系化を考える

教師の役割を分類させるとそこに要するものと要らないものを明確化しようとする

目的	授業進行計画の作成・L P s - 提案、仮説検証シート 計画を成案とする科的概念を特定する (質問、能力を育むために前にかねる見 方、考え方を提示する)	目標と学習の科学概念を特定する (育成すべき資質、能力を特定する)
手段	仮説検証型授業の実施 ①科概念【教育の知識で考え】を提示、活用する (目的の理解と探究・考え方を導くなど)	
	新しい科学概念【学習後に経験できた知識で考え】を活用する (探究・思考の発展など)	

○考察

子どものメタ認知能力と数算のメタ認知能力を向上させるための授業作り
教師が子どものメタ認知能力を向上させるための働きかけ
子どもに投資/出資をもっと増やせばよいに似る3つの性質がある。
子どもと大人のメタ認知能力を向上させる授業の目的であるということ
教師の人間性/資質の形成に大きく関係しているということ
→授業の目的を明確にすることが、目的を達成に主体的に挑戦に取り組むこと
→「主体的に取り組む」とは
①「目的を達成するに必要だ」ということである。
②「目的を達成するに必要だ」とは、「目的を達成するに必要だ」ということである。
③「学習の意図を持つこと」は、学習の意図を持つことである。
教師の意図は、これら3つの要素がすべてあり、実際に実行を行った結果、意図の目的を達成して学習に取り組むことができるようになることが期待される。

2

M1 中越和奈さん 既習の文法を使い、自分の考えを英語で書く言語活動の研究

高校生を対象にした文法の基礎基本の定着を図るためのポートフォリオを開発し、その効果を検証しました。文法事項をポートフォリオに整理して書くことや、その文法を使ってライティングを繰り返す行うことで、生徒の英作文の量が増え、質が向上しました。



目的

作成したライティングのポートフォリオの効果を検証する

①文法理解の有無

 ＊生徒の自己評価
＊文法テストの平均得点

②生徒の英作文の質

 ＊週末課題の英作文
（語数・表現）

M1 畠中憲太さん 不登校を未然に防止する学級づくり

研究デザイン

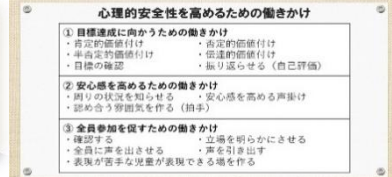
教師がレジリエンスを高め、生徒のために、生徒への肯定的評価を確立させる。それが学習意欲（生徒の好意・集中度）により影響を与えることを検証する。

 【対象】
高知市内の公立中学校に勤務する教師1名およびその勤務校に在籍する1年次22名


不登校問題の解決に向けて、学級経営に役立つ教師の働きかけについて研究しています。今回は「肯定的評価」に着目し、教師の発話内容からみる感情値と生徒の好感度・集中度の変化について分析しました。今後は、より汎用性がある教師の働きかけについて研究を進めていきます。

M1 松山起也さん 主体的・対話的で深い学びにつながる学級づくりー心理的安全性を高める算数科の授業実践を通してー

授業実践・分析の結果、授業において学級の心理的安全性を高める働きかけには、「目標達成に向かう」「安心感を高める」「全員参加を促す」という3つの目的のもと、14種類の働きかけがあることが明らかになりました。今後はこれらをさらに整理し、汎用性を高めていきたいです。

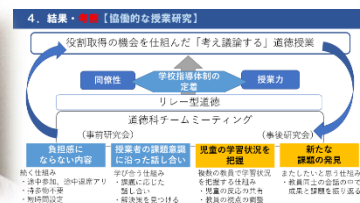


M1 水口 落さん 複式学級における ICT を活用した授業の研究

ICT を効果的に活用することで、複式学級におけるデメリットを解消すると共に、探究的な学びを実現することを目的とし、コミュニケーションツールや思考ツールとして ICT を活用した授業実践を行いました。今後も ICT を効果的に活用した授業デザインについて研究を進めていきます。

M1 宮崎奈苗さん 考え議論する道徳を目指した協働的な授業研究

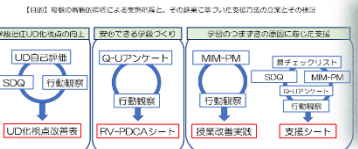
見取りの判断が容易ではないといわれている道徳性をセルマンの提唱する役割取得能力の発達を基に焦点化し、その発達の段階に応じた道徳授業の実践に取り組みました。また、児童の道徳性を育むため、道徳科チームミーティングによる協働的な授業研究の在り方についても実践検討します。



【特別支援教育コース】

M2 島崎やよいさん 支援が必要な児童への効果的な支援方法

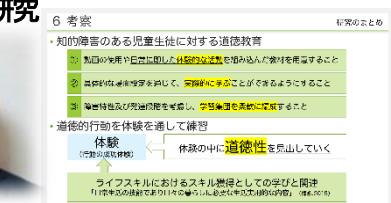
【目的】 児童の行動特性による支援方法、その結果に基づいた支援方法の立案とその検証



本研究において、通常学級における支援が必要な児童への効果的な支援方法の構築には、学級担任、学級全体の児童及び支援が必要な児童の実態把握をした上で実態に応じた支援を考え実施すること、わかりやすい指導・授業づくりを行う視点が必要であるということが明らかになりました。

M2 土居一平さん 知的障害特別支援学校におけるライフスキルの視点に基づいた道徳の研究

知的障害のある児童生徒に対する道徳科の授業は、ライフスキルの視点を参考に、日常に即した体験的な活動を通じて実際に学ぶこと、授業者が体験の中に「道徳性」を見出していくことが重要であると考えます。今後も、知的障害の道徳科について、系統的な学びとなるよう、授業実践を重ねていきます。



M1 大島励仁さん 高等学校における SST の実践的研究

Ⅶ 考察：成果のまとめ	指導内容・学立て	効果	行動変容
通級による指導	・CBTによるSST ・ストレス管理の意識的提起 ・ストレスマネジメントの学習 ・実行可能な対処方法を複数 ・発表 ・自己決定	・スキル実行の心理的ハードルの低下 ・心理的安定 ・認知的变化	・前向きな学習への参加 ・通常学級でのスキル実践
通常学級での授業	・環境調整 ・スキル実行のサポート	・ストレス軽減 ・認知変化	・対症行動の実践 ・行動問題が1/12に減少
学校生活全般	・行動調整の心理的負荷の軽減 ・有	・教員が特性に応じた適切な支援	・心理的安定

個人変容と環境変容両面へのアプローチがないとSSTが有効に働かない。機能的なSSTという行動学習に適切な学びの行動の分析が必要。当該が全体的に理解を深めることができたことが成果となった。



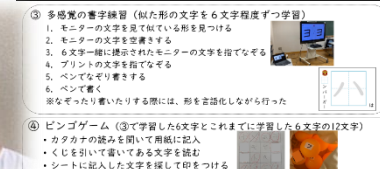
高校生が授業内で困ったときに上手に対処できるように、機能的行動分析と認知行動療法を組み合わせた社会的スキルトレーニングを行いました。特徴的なのは授業環境調整を積極的に連携した点です。今後も、通常学級と通級指導教室とが連携した指導の効果を検証していきます。

M1 楠瀬陽子さん LD-SKAIPによるアセスメントに基づいた読み書きが苦手な児童への支援

児童の読み書きのつまずきに早く気づいて指導できるように実践研究をしています。スクリーニング検査によって読み書きの苦手さを発見し、その原因を理解して指導するために LD-SKAIP を実施します。個別指導で効果があった指導方法を通常学級の授業のUD化として提案したいと思います。



Ⅲ 指導方法（3.カタカナの読み書き指導）



4 考察

資料を記入することが目的となり、学年団での協議・共有が軽視される「**形骸化**」が起こる。

↓
ゴールイメージの明確化・随時の目的確認

↓
支援会・ケース会実施の有効性

↓
学習支援における他指標での評価・具体的な教師の指導法

【今後の課題】

教職員を個業化させない体制づくりのための改善

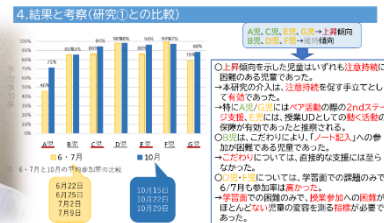
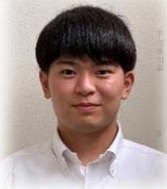


M1 古味 梢さん 特別な支援が必要な生徒に対するチーム支援

中学校でチーム支援体制を構築するため、客観的なデータ分析のサポートと授業改善の提案、学校体制づくりの提案を行いました。複数の質問紙の実施によって生徒のニーズを把握したために、支援の必要性が共通理解されました。個のニーズに対応できるチーム支援体制づくりを進めます。

M1 廣瀬 空さん 小学校における個の学びを保障する学習指導の検討

2nd ステージ支援対象児の行動を分析し、算数科授業における参加と理解を促す支援について検討しました。結果として、本研究の介入は参加行動の改善に有効であることが示されました。今後は、学習面の困難をより詳細に分析し、参加から理解へつなげる支援を検討していきたいです。



【各コース別・テーマ別協議内容】

【**学校運営コース**】それぞれの研究内容に関連付けて、①多忙感・業務改善、②コミュニケーション・信頼関係をテーマとし、協議を行いました。

まず、①について、改善には負担感の軽減につながるような教員同士の教材・資料の共有や、コミュニケーションが必要であるという意見が交わされました。また、②について、授業づくりを通してコミュニケーションが活性化され、信頼関係の構築につながった等、教員のキャリア支援と精神的な支援がなされることで相乗的な効果が期待されること、同時に、小学校において中学校における「タテ持ち」のような学び合いの仕組みの構築を期待する、という声もありました。

協議を通して、よりよいものを作り出すためには、当たり前を見直すという意識改革も必要であること、また多忙感の解消のためには信頼関係が構築されることが重要なのではないかとすることも確認されました。

【**教育実践コース**】（学級経営）学級経営のグループでは、1年生の発表を中心に「学級経営に関係すること」をテーマとして、1年生からの研究の概要説明、及び補足説明がなされた後、具体的な学級経営の取組について、フロアの方々と意見交換をしました。「ほめること」について、様々な意見が出され「児童の発達段階に応じて、ほめ方を変える必要がある。そうでないと効果が表れない」「ほめる前段階として、教師と生徒の信頼関係が大切ではないか」などの、それぞれ個に応じたほめ方や心構えなどについて共有しました。

（**道徳教育**）「道徳科の授業力向上のための校内研修の在り方」というテーマで協議しました。院生（M1）の実践発表を基に参加者からは多様な意見が出されました。学校現場で取組を定着させるためには「振り返り」、「おもしろさや楽しさ」、「学び合う喜び」、及び「安心感」などから子どもの成長を感じられることが必要であることなどが提案され、意見を参考に来年度に向けて、道徳科チームミーティングを計画していくことなど話し合いました。

（**教科教育**）テーマ1「基礎学力の定着と応用力の育成」について、「教科学習に対する意欲」が必要であることを前提とし、各校種・教科における考えや実践について協議を行いました。その中で、ICTを活用した探求的学習や個に応じた学び、授業とリンクさせた家庭学習の充実、及び学習活動の質を向上させること等の必要性を共有しました。

テーマ2「ICTの活用」では、ICTを活用する利点や課題について意見を交換し、「C（コミュニケーション）」の視点を持った授業設計を教科の特性や目標に基づいて行うことの重要性を再認識し、次年度への方向づけとなりました。

【**特別支援教育コース**】『校内における「個別の指導計画」の活用についての現状と課題』について、院生と参加者で協議を行いました。高知県では、支援が必要な児童についての個別の指導計画が確実に作成されるようになり、校内支援会等でも児童生徒に対する資料として使用されるようになりました。

一方、全体の教員で共有し、指導・支援に生かす資料としての「活用」については、課題も挙げられました。「活用」するためには、各教員が「個別の指導計画」の意義に対する共通理解をもつことが前提であり、そのうえで研修等を通して具体的な作成方法や支援の手立てを身につけることが大切です。また、運用の要となるコーディネーターや管理職が、個別の指導計画の活用を含めた特別支援教育に対する理解を深めていくことが重要であるという意見も出されました。そして、教職大学院を修了した教員が中心となって、特別支援教育に関する専門性を生かし、実践し、広めていくことも重要であると確認されました。

オミクロン株の急拡大という厳しい状況下ではありましたが、それぞれの院生の研究に対する期待が寄せられました。さらに高知県の教育課題解決はもとより、それぞれの研究を通して、これからの高知県の教育の充実と、子どもたち個々の成長への期待も多く寄せられました。

今回の「第9回土佐の皿鉢ゼミ」は、2022年8月17日（水）開催予定です。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 柳林 彦彦

編集者：教職実践高度化専攻総務係・ニューズレター委員

発行日：2022年2月28日

事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター

〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1（教職大学院係）

TEL 088-844-8457

E-mail ks33@kochi-u.ac.jp